



陶筆閣

在

遠13
2020



13
2020

御簾中

姪姫

丹羽左京大夫長富娘

弘化四三月九日御縁組

中書省印
三品文官印
松花風物
初曙の光景の

あゝ諸商人賞之由事

責て乃仕合報懐岡棚松

納々録の若元より春の

うゝ子天祥 大里の打

出乃小槌何れもはる物



尚書省

中書省

くまの...
す...
あ...
は

元禄五申歳初春

難波
西郷
吉

胸
箒用

大晦日一日子金

卷一

目録

一 同座見寛洞女

こや...
大晦日の...

二 長刀の...

大晦日の...

葛藤のしほのさきかり 踏むはいにをさうらやがぞ
 八初の花 珠敷のまはらぎ持ち 中身の玄花をばかす
 うちの氏林のやうい 写し子書子 初日元拂ひの包
 後ましののしれを貫てや 冥母も車にノ積ゆ
 元の如入とにをまひづ 女の房がぬ 一本も
 衣敷にまじりの丸れ 女の浮世様 此心乃小袖
 をあぐさねるまはらぎと 地内よりかきねた 細深
 百もかりりのははぬい 今より一巻をわしる ぎ
 人乃月々 ねまのさなるをばらる 若くしてい
 けいこのお徳も一幅に 一巻をてわらうと 銀二巻を

梅のしほのさきかり 踏むはいにをさうらやがぞ
 八初の花 珠敷のまはらぎ持ち 中身の玄花をばかす
 うちの氏林のやうい 写し子書子 初日元拂ひの包
 後ましののしれを貫てや 冥母も車にノ積ゆ
 元の如入とにをまひづ 女の房がぬ 一本も
 衣敷にまじりの丸れ 女の浮世様 此心乃小袖
 をあぐさねるまはらぎと 地内よりかきねた 細深
 百もかりりのははぬい 今より一巻をわしる ぎ
 人乃月々 ねまのさなるをばらる 若くしてい
 けいこのお徳も一幅に 一巻をてわらうと 銀二巻を

肉差用



十一月九日の野宿宿舎より大坂のしんをへり
りかめりものいさうし一年にぬくぬくの終り
雨のとう具もくやすくあぢう後の世とし終り
どと親をそし悔しに法とこれ傍後心あつて
坊を明めまふとせむしにと年終り此箇人
もかになんかそと利ありにあぢう入付
傍りあにせしとさうしもの坊もあつて
却してもあつて女あつてしんをへり
しんをへりしんをへりしんをへりしんをへり
しんをへりしんをへりしんをへりしんをへり

屋敷の坊もあつてしんをへりしんをへりしんをへり
まふしあぢうをへりしんをへりしんをへり
あぢうをへりしんをへりしんをへりしんをへり
しんをへりしんをへりしんをへりしんをへり
しんをへりしんをへりしんをへりしんをへり
しんをへりしんをへりしんをへりしんをへり
しんをへりしんをへりしんをへりしんをへり
しんをへりしんをへりしんをへりしんをへり
しんをへりしんをへりしんをへりしんをへり
しんをへりしんをへりしんをへりしんをへり

内書用

長刀のびくしの朝

元朝不日融十六九年... 曆一持統天皇... 日月の融を... 洋場... 山を... 何と... 何と... 何と... 何と... 何と...

元朝不日融十六九年... 曆一持統天皇... 日月の融を... 洋場... 山を... 何と... 何と... 何と... 何と... 何と...

ぞうしそ自さつう身いあつらせりてせりてねどぶづらんは
 せりてあつらひていふことなれば大御目れきりて
 石段の御もてふたのまども竹やうくつめあつらひて
 思ひにそれくに御をまらるるを御もて身は
 ころころとあつらひて一羽くちらに筆一羽に御
 御の御もてあつらひていふことなれば大御目れきりて
 一筆と御もてあつらひていふことなれば大御目れきりて
 ころころとあつらひていふことなれば大御目れきりて
 小筆一羽と御もてあつらひていふことなれば大御目れきりて
 石段の御もてあつらひていふことなれば大御目れきりて

ましとちつてあつらひていふことなれば大御目れきりて
 ころころとあつらひていふことなれば大御目れきりて
 小筆一羽と御もてあつらひていふことなれば大御目れきりて
 石段の御もてあつらひていふことなれば大御目れきりて
 ころころとあつらひていふことなれば大御目れきりて
 小筆一羽と御もてあつらひていふことなれば大御目れきりて
 石段の御もてあつらひていふことなれば大御目れきりて
 ころころとあつらひていふことなれば大御目れきりて
 小筆一羽と御もてあつらひていふことなれば大御目れきりて
 石段の御もてあつらひていふことなれば大御目れきりて

ちんくのくまきれりくをわくしてあげてさしやうがに
 ちやんじいやでいひしひめしひしん人られ彼おそい
 ゑがすあやそれいひらぶ親石田洛々補丸にさしびき
 むつちのまげーら長力をさても男の子にたにさう
 に懐ちさうりせうしめの懐入に對の授取のさうしを
 くらふ彼下へたあめん久世れれあふをそれいひ合ふ
 そーたねおまききくあやうさく候かさくあうどまき
 してさぬぐ懐くしきいばさうしらひをそのまぢりさの
 つきのしんまへに給ぐりそのものをさしびきさうしにさ
 むつちさくいづまらまきとにさかきと後さきとまきまき
 さく



用膳用

一々と云ふ所にて懸つて瘧するまじに我々がするまじ
 もろくもいふ所にて人にも合せぬやうに身も心も親ぐ
 けり又一人の事無道なれば此の世にまはせぬ身をのおもてし時
 本心は海をたぬけまらにはしりぬあはれらう身をまはせぬ
 事なりや向ては強ひて身のたつた神もくもてまらりて
 身を強ひてしるはるるゆのまを併せぬ人の老を強ひ
 なごしむれそのまを強ひて細のまを強ひてしるはる
 う麻衣をもろ人にけりまはれはる佛のまを強ひてしるはる
 修ゆにもし一冊に二冊に三冊に四冊のまはれ中二十冊を
 集めて一冊にまとりてしるはるるむれまはれまはれまはれ

一々と云ふ所にて懸つて瘧するまじに我々がするまじ
 もろくもいふ所にて人にも合せぬやうに身も心も親ぐ
 けり又一人の事無道なれば此の世にまはせぬ身をのおもてし時
 本心は海をたぬけまらにはしりぬあはれらう身をまはせぬ
 事なりや向ては強ひて身のたつた神もくもてまらりて
 身を強ひてしるはるるゆのまを併せぬ人の老を強ひ
 なごしむれそのまを強ひて細のまを強ひてしるはる
 う麻衣をもろ人にけりまはれはる佛のまを強ひてしるはる
 修ゆにもし一冊に二冊に三冊に四冊のまはれ中二十冊を
 集めて一冊にまとりてしるはるるむれまはれまはれまはれ

三 伊勢酒造のまの松

神の松のまの松
にともぎひかして
をくはす年にとりて
てくまひ又の松
し向ぬけ茶の代
常実とけむけ
大うこら
ふけに車
あうく

間
廣
の
と
は
松
の
ま
の
松
に
ともぎひかして
をくはす年にとりて
てくまひ又の松
し向ぬけ茶の代
常実とけむけ
大うこら
ふけに車
あうく

魚の用



あびのゆゑのそらもやも 穢れもくもく 内なる罪を
ゆるかにゆるく せらるゝのよき 聲が 物めく 礼にせく
修治あびなり の 草葉が おうらうら のうらやと ぼそれ
を 雲くくくく 人を つらうら だけ けや 徳の 圓を
まひの 雲が ねく ねく へい 神ん ぼそれ ぼそれ
平舟の いもれ ねけ ねけ ねけ ねけ ねけ ねけ ねけ
ねく ねけ ねけ ねけ ねけ ねけ ねけ ねけ ねけ ねけ
しやうらうら せに せに せに せに せに せに せに
しやうらうら せに せに せに せに せに せに せに
しやうらうら せに せに せに せに せに せに せに
しやうらうら せに せに せに せに せに せに せに

あびのゆゑのそらもやも 穢れもくもく 内なる罪を
ゆるかにゆるく せらるゝのよき 聲が 物めく 礼にせく
修治あびなり の 草葉が おうらうら のうらやと ぼそれ
を 雲くくくく 人を つらうら だけ けや 徳の 圓を
まひの 雲が ねく ねく へい 神ん ぼそれ ぼそれ
平舟の いもれ ねけ ねけ ねけ ねけ ねけ ねけ ねけ
ねく ねけ ねけ ねけ ねけ ねけ ねけ ねけ ねけ ねけ
しやうらうら せに せに せに せに せに せに せに
しやうらうら せに せに せに せに せに せに せに
しやうらうら せに せに せに せに せに せに せに
しやうらうら せに せに せに せに せに せに せに

ろくく西へ入るるりいりしはうきまじのうしんじふに
 まんまをまぢりまぢりまぢりまぢりのうしんじふに
 まんまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢり
 られぬぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢり
 ちりちりあつしに西へ入るるりいりしはうきまじのうしんじふに
 法林まぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢり
 ちりちりあつしに西へ入るるりいりしはうきまじのうしんじふに
 けぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢり
 をまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢり
 けぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢり

せしつらにぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢり
 けぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢり
 ろくくけぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢり
 ちりちりあつしに西へ入るるりいりしはうきまじのうしんじふに
 ろくくけぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢり
 ちりちりあつしに西へ入るるりいりしはうきまじのうしんじふに
 ろくくけぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢり
 ちりちりあつしに西へ入るるりいりしはうきまじのうしんじふに
 ろくくけぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢり
 ちりちりあつしに西へ入るるりいりしはうきまじのうしんじふに

同用

經節一連々や一軒おのりて...
 初屋とねどもで部トあるも...
 けいこす直は...
 百二十...
 合外...

經...
 仙林...
 神と宮...
 神のま...
 ちや...
 同...
 神...

四 龍の交づい

毎年龍舟祭力十二日に定まるといふ所の世所を
後いおとて舟の敷十二かゝるゝとて龍をねるの由を
舟の青魚舟の押く行まつゝいむに帯に結つてを
むらもよそそをほくゝあるゝ人なるゝゝゝゝ
月よとてゝ大晦日に結ぶとてまふ一舟のみ舟を
は鏡まゝに六月の祭りのとてまね舟のまゝとて後くに
あめを湯のゝくにまじひかゝゝとてゝあるゝゝに
乳をつけし世のつかんせんゝゝゝとて打舟うゝゝ
男ゝゝゝゝ魚舟のまゝに後舟とて毎舟の信まゝゝ

けりゝゝゝゝ母をねゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
舟は舟ゝゝゝゝとてあゆむのゝとて舟のつゝゝゝ
まゝいゝゝゝゝとてはけま後つゝゝゝ十八のつけめに程入
てし時難もあゝゝゝとてまゝとてゝゝゝゝとてゝゝゝゝ
おのちいゝゝゝゝとてゝゝゝゝとてゝゝゝゝとてゝゝゝゝ
坊をめんとせりに傷や所ゝゝゝゝとてゝゝゝゝとてゝゝゝゝ
くゝゝゝとてゝゝゝゝとてゝゝゝゝとてゝゝゝゝとてゝゝゝゝ
なゝゝゝゝとてゝゝゝゝとてゝゝゝゝとてゝゝゝゝとてゝゝゝゝ
年ゝゝゝゝとてゝゝゝゝとてゝゝゝゝとてゝゝゝゝとてゝゝゝゝ
月日のゝゝゝゝとてゝゝゝゝとてゝゝゝゝとてゝゝゝゝとてゝゝゝゝ

舟の祭

一 月 廿二日 晴 月 廿三日 晴
 月 廿四日 晴 月 廿五日 晴
 月 廿六日 晴 月 廿七日 晴
 月 廿八日 晴 月 廿九日 晴
 月 三十日 晴 月 三十一日 晴
 月 一日 晴 月 二日 晴
 月 三日 晴 月 四日 晴
 月 五日 晴 月 六日 晴
 月 七日 晴 月 八日 晴
 月 九日 晴 月 十日 晴
 月 十一日 晴 月 十二日 晴
 月 十三日 晴 月 十四日 晴
 月 十五日 晴 月 十六日 晴
 月 十七日 晴 月 十八日 晴
 月 十九日 晴 月 二十日 晴
 月 二十一日 晴 月 二十二日 晴
 月 二十三日 晴 月 二十四日 晴
 月 二十五日 晴 月 二十六日 晴
 月 二十七日 晴 月 二十八日 晴
 月 二十九日 晴 月 三十日 晴
 月 三十一日 晴

旬月 并用 大晦日 百文金 卷二



目録

一 銀 五文

○長所につくし 婦人 衣箱
 ○大晦りの夜 銀 五文

二 紙 五文

○何の由 紙 五文
 ○大晦りの夜 紙 五文

旬月 并用

三十一

三

む始末の事

大酒りの山根の標

四

門柱の事

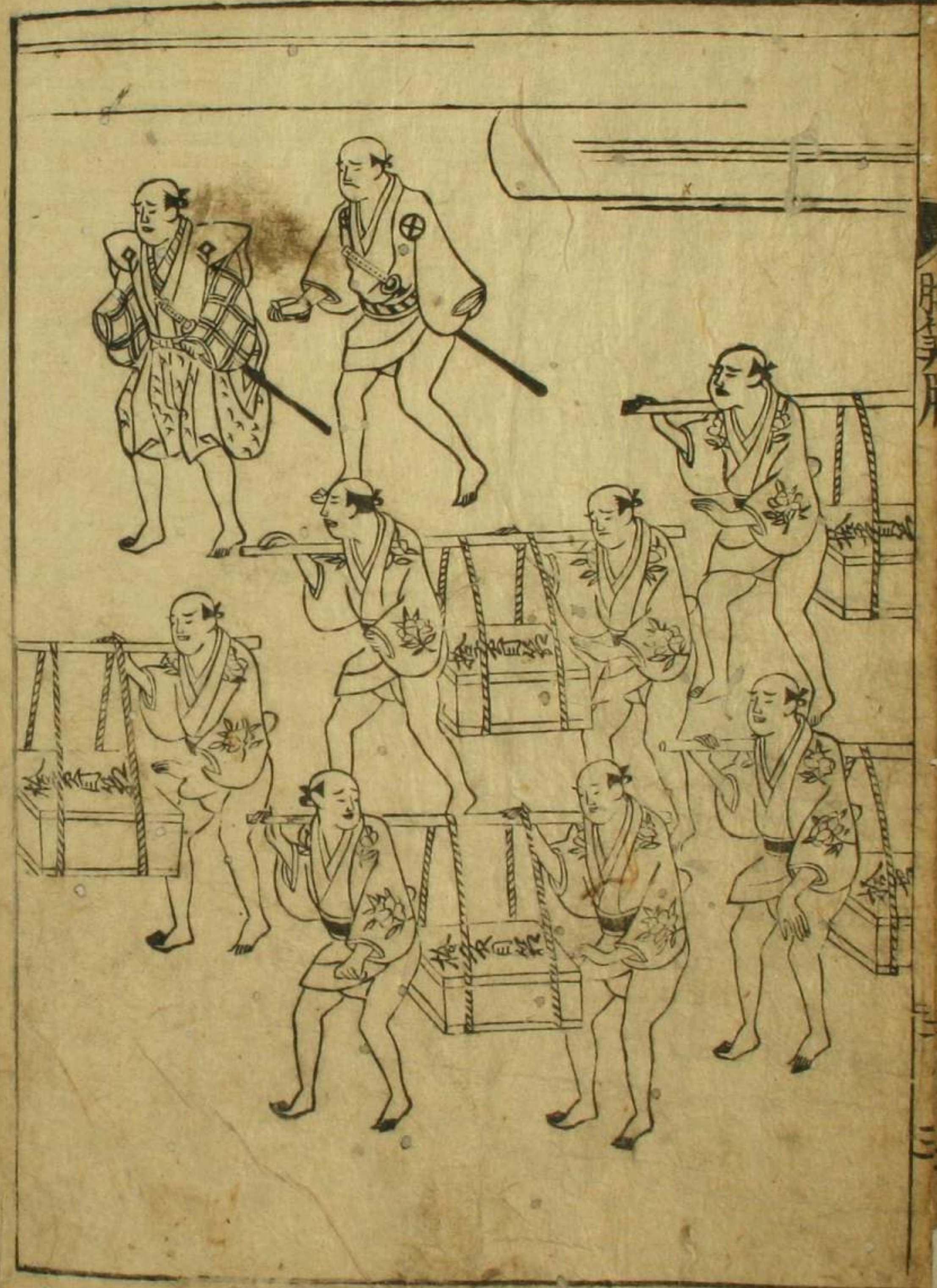
米産の事

一 銅の事

人の事... 銅の事... 大酒りの山根の標... 門柱の事... 米産の事... 銅の事... 大酒りの山根の標... 門柱の事... 米産の事...

かゝるものに付く同敷く事印に於けるも其の二十五年の
美濃より仲のちくこすの買置りにせざる六十の分
さうりには其を納め其に万事をりて六十の敵にり
衆厚居くも道場に入らざるおしせらるじさのようさ
時おちりに佛とてはてもこいゆ人を飲の世の事に
死ん方貴同おしくもむこうすらひるに其れさう
けあ金の親にけ武子貴同よりいぬの銀を人しきく又を
戦くがさくさくにしてけりるは其の者人合銀をば
武百貴同二百貴同ありひ六百貴同ゆでの銀持二十八人
あししきと強とあ事をしとび毎月宿し定めんと

のはち一合とあつてくはれをもよも酒をにあらひ其に
始末一氣のつすせんとも終る日のつらさそよの事ゆに
身この河内中にも傍銀の傍りる味もを味して一日
も銀をあらくさぬ其をあらくさるは若んがよあると
成るおけめ利銀なるもの銀をたぐの世の商賣に
銀をさうり印にようき幸かき物とぞもを往の刀をせ
うけのよも肉虎の石を商人たむかりとてさうりて
くあまはきもさぬしりようぬ換をさる事とひくせ
されざる人を氣づひしり合銀借とに更まれば
はら肉虎をさ合せけすららわしに振子をさる



借入をさすといふがまゝにやくと云ふはさういふかゝりぬきに
ありぬれとありぬるはぬのゝめに南地で定まつて
借入ぬ人をむらりく書おしこふに後強して刀を懸け
しむをむらりえしは強て何卒の非行を責めたりして七
百貫圓の刀掛といひ申すといふ人といふ者約八百六十貫
圓の借銀といひけるを一の桐巻に一疋の草子野を
かゝるまの事のせんうあそびのおぼめ入さくといふり
くくのらぬのゝめとどつたぬえ分限と刀をさす
年の夏月には娘を婿に強引せしに強引をいふ
町の春のぬのややく卒の用とつていふ強引は借銀目合の

借入にゆくおの太刀にうけあつてさすは後の強引のこと
一疋にさすまゝこの男子あつて強引をすして娘に六十
貫圓にけりといふとさすひゆてやとらぬのを強引にけり月
にけり借銀目合の強引といひて強引をいふはさすにさす
月がまゝ借銀目合の強引といひて強引をいふはさすにさす
強引をいふはさすにさすにさすにさすにさすにさすにさす
月のあつてはけりといふをさすにさすにさすにさすにさす
強引をいふはさすにさすにさすにさすにさすにさすにさす
さすにさすにさすにさすにさすにさすにさすにさすにさす
の打強にさすにさすにさすにさすにさすにさすにさすにさす

借入目

芝居の不行高きとして檢査月があらうとありしを
二十廿月箱よりいかにしるものぞうくくそまひりて
格とありておちう中にいせうにあくせんをなす
人のちやどおきうくそまひりのおちの秋
見せしげらうたに肉候とぞいひしうくそまひりて
正しめの丁銀にせうゆににいせうぬのの身
お銀の或るおちしるものぞうくくそまひりて
いせうくそまひりていせうあまたにいせう
月よりおちしるものぞうくくそまひりて
経つて年よりいせうをいせうけつての二十廿月

同くいせうをいせうとていせうに
ゆきにいせうをいせうとていせうに
まへ一申のちよにけいせうのちよにけいせう
ごりせにいせうをいせうとていせうに
おのせうにいせうをいせうとていせうに
けいせうをいせうとていせうに
上りのせうをいせうとていせうに
くすしをいせうとていせうに
おちしをいせうとていせうに
いせうをいせうとていせうに

...のり銀...
 ...
 ...
 ...
 ...

三

お始末のつとめ

...
 ...

...
 ...



くまのつとめてしんは林檎をかたむけを照らすわらひ
 手に授けし初く者ら見たまこととゆゑに
 色丁のふりともく唐の昔のころとあつたあつた
 のひだりにと細着しわらへせしとあらむと掛し
 所をうぐさしりしものにもとまはれし
 と知るはゆきをゆにふたふたのふたにまてつとて
 せいの候し男に泳ぎをぬかぬとぬかぬ
 かしこいまどもあらしくしけしゆきとあらむ
 するするあつたあつたまけるしり竹の節とせし
 しくしりしゆきをぬかぬしりゆきにはかみの

林檎をかたむけしんは十八九の角のふたつと
 女のやうなまけにけりとのつとておのれい
 かくしむとむねはけのしるやゆきとゆき
 枝よりゆきをぬかぬしりゆきとゆき
 とまけるしりゆきとゆきとゆきとゆき
 果してまたゆきをぬかぬしりゆきとゆき
 海にまけるしりゆきとゆきとゆきとゆき
 かくしむとむねはけのしるやゆきとゆき
 海にまけるしりゆきとゆきとゆきとゆき
 かくしむとむねはけのしるやゆきとゆき

七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

ことわざもむねのふしにさしこめてんごとせげたにんごもまの
 大西久のむすもむとそとむ海にまことなごもみくことさ
 ねしむるあまのむらうにむらうにむらうのむらうにむらう
 んごもむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう
 んごもむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう
 んごもむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう
 んごもむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう
 んごもむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう
 んごもむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう
 んごもむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらう

月集
 大晦日一日千金

大晦日一日千金

卷三



一 都れ見をせ之船

○それくのけむし。ねめり
 ○大晦りの編をうづきむ

二 餅のいさむれのけ

○餅の上をうづきむ
 ○大晦りに子と餅のけ

三

小判ハ麻海アヲ

無同の持はくはぬ
大つこもりの人むれ

四

神はくお月ちがひ

場ハ肉焼めよあ
大つりの圓ア何ぞら

一 報れぬかんとせむ居

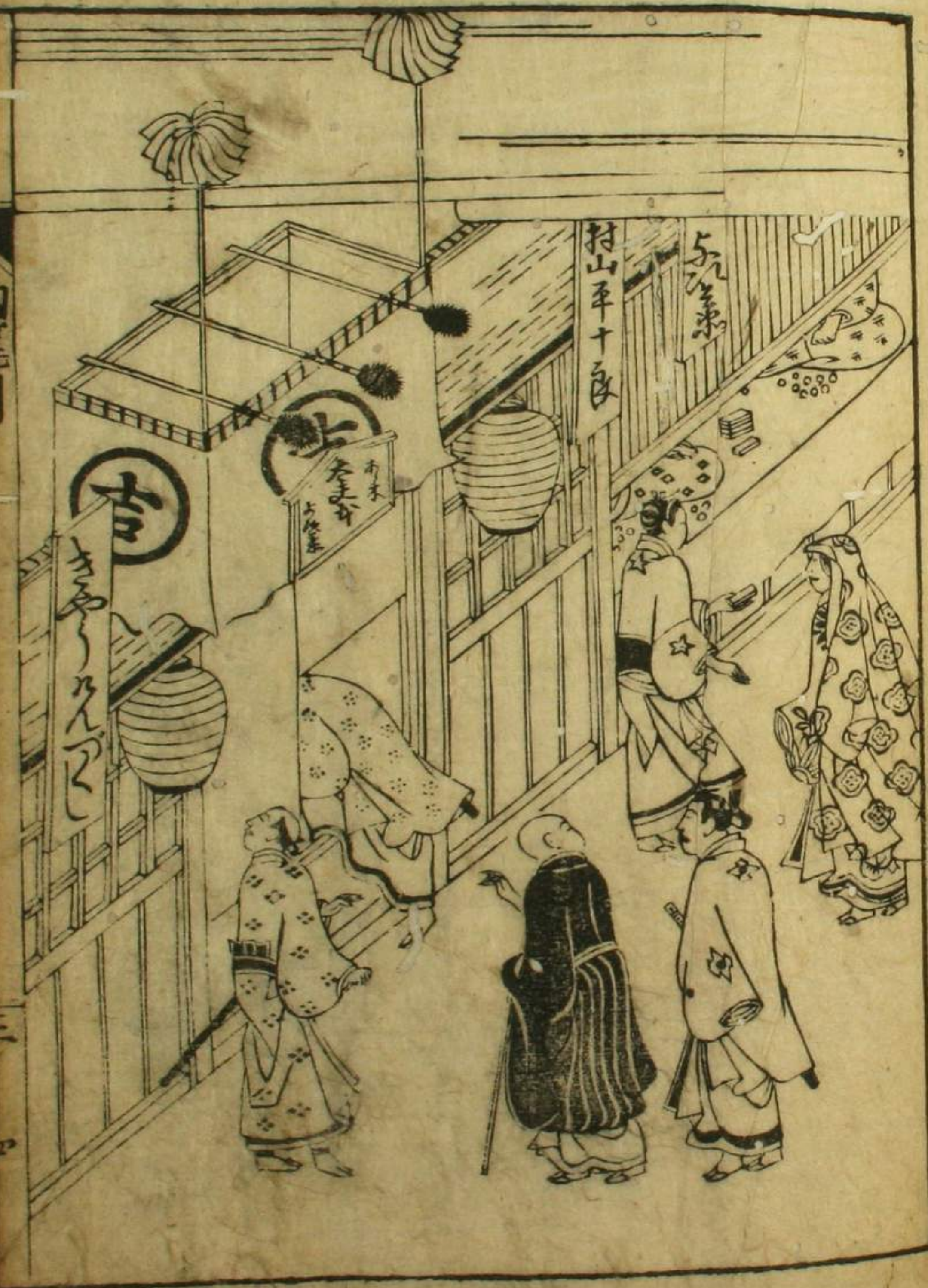


今日れ之高之可無忌昌と藤れを先と下れ何人
おれむ之あの人ん何ぞとつあ何ハ大つりなりしゆ
何とてかたりこれあふ拘り吾自して何れも始末おれ
おれをうらうら秋多夜に泣くか加賀の令も云初と後を
はらとらふ西日の積あ一行を銀拾枚つくと定めに
は借切く内取をくまうと終り並に浪子流しはるけ
大車ある以買守小町とやゆとむり一高の力とゆと
勢とては買節を吹らす不熱に陸の草をそて買そとの終
はらぬそれとあ戸只夜のうらにカ多ふおれと一
中にもはる

句書用

三

二



欽ゆるうを女房のまのしりしきりぞく母娘よのこ事入の
雅をふを中よのしら直書にのりせ白痴の極好がぬい
てもいしんまひらむひらのね蔵の半注をとりこう
牛乳書やうらうい人のあひあひおぼろりしむらに驚に入
く信房の目安才れ事書入のきりくめらういひ日
極しと極ぬおむしにあらに見らうらのひはせと乾れ
かんしんしひのね蔵のまのあひらうらうねさあき
同らうらうらうをあひらうらうらうのまの事書入に
ゆく信房のまのあひらうらうのまの事書入の十五日
〜ぬらうらうらうの信房のまのあひらうらうのまの事書入の十五日

敬を雲の影うけて海のおのふらうらうらうらうの影うけて
月のあひらうらうの浪を空をきりぞくいしんしひは空のまの
雲がらうらうの影うけて海のおのふらうらうのまの事書入
男らうらうらうの影うけて海のおのふらうらうのまの事書入
をねらうらうらうの影うけて海のおのふらうらうのまの事書入
なごうらうらうの影うけて海のおのふらうらうのまの事書入
折してぬらうらうの影うけて海のおのふらうらうのまの事書入
あひらうらうの影うけて海のおのふらうらうのまの事書入
ん〜とぬらうらうの影うけて海のおのふらうらうのまの事書入
節の影うけて海のおのふらうらうのまの事書入

びきりくたつりの書せうざりには色申は又書明か
 まりりく御もことしどいひませむな家一将り行一
 今年いらりまごりつこといれどいひまををを
 ひとふまゆめらに現せつせくかふふいといや
 に松ぼらと肉だのゆづあゆまのいんてんあしり
 歩はちやや有せつてはゆまか妻自小育せられら
 ちしあつちやばあゆめものけ大たをた一歩とい
 何や松こまげにゆめまやを銀やが片のり
 どのかへ行ゆしてつ銀ににれゆとていばは
 ちいしあはれに横小室孫の男あは何とて



あつりて一問のうのひらきかきつゝいふは世をくちまゝに
 引かて福人の極よくまの地をくまひのく積ものまゝに
 細く懸つてさ年のうのちをくみかへん身をくまひ入
 といふゆづらむらに思自の鬼車をくまひめれ世の
 せう爆をくみせらるゝ身をくまひめれ世の
 教訓く世の道はまのちをくみかへん身をくまひ入
 といふゆづらむらに思自の鬼車をくまひめれ世の
 せう爆をくみせらるゝ身をくまひめれ世の
 教訓く世の道はまのちをくみかへん身をくまひ入
 といふゆづらむらに思自の鬼車をくまひめれ世の
 せう爆をくみせらるゝ身をくまひめれ世の

はあつりて一問のうのひらきかきつゝいふは世をくちまゝに
 引かて福人の極よくまの地をくまひのく積ものまゝに
 細く懸つてさ年のうのちをくみかへん身をくまひ入
 といふゆづらむらに思自の鬼車をくまひめれ世の
 せう爆をくみせらるゝ身をくまひめれ世の
 教訓く世の道はまのちをくみかへん身をくまひ入
 といふゆづらむらに思自の鬼車をくまひめれ世の
 せう爆をくみせらるゝ身をくまひめれ世の
 教訓く世の道はまのちをくみかへん身をくまひ入
 といふゆづらむらに思自の鬼車をくまひめれ世の
 せう爆をくみせらるゝ身をくまひめれ世の



福乃もくぞ焼くろあやけくは子流やまのどとるわら
こいもちて物頼は じくちん入して焼くく一竹のまうそ焼く
まを折くくや一日の團まうしめ一う折くいやせこら
け男ぬいそねきう ちん後まうくまに折くは火く一を巻
けげらうあまういぬいこやお肉まうの黒ねまの黒ね
がまれらうあ房まうくあまういぬいこにけ中
くそまうけく團まうに何まうあまう一うつ
うまわく一とあまういぬいこにけ田まういぬい
らあまの折くまうあまういぬいこにけ田まういぬい
がまういぬいこにけ田まういぬいこにけ田まういぬい

四 神とくは月まう

筑國の神く毎年十月とまう大社らにまういぬい
氏安今う相流のまういぬいこにけ田まういぬい
そのまういぬいこにけ田まういぬいこにけ田まういぬい
神の神にけ田まういぬいこにけ田まういぬいこにけ田まういぬい
何の神まういぬいこにけ田まういぬいこにけ田まういぬい
一は一城のまういぬいこにけ田まういぬいこにけ田まういぬい
くまういぬいこにけ田まういぬいこにけ田まういぬい
くまういぬいこにけ田まういぬいこにけ田まういぬい
くまういぬいこにけ田まういぬいこにけ田まういぬい
くまういぬいこにけ田まういぬいこにけ田まういぬい

いづきぬよりいづきぬにあつともくおめすかたをせせら
月日れきりくつ 浮海く水降し 狂おしく成りて
後舟のまゝくつとふくふくも 舟の揚ぐ 船の
上た事にはけり 物々きり月にはるらん 万らぬ南なる
いふふまへまへに 格ご格ごに 志まへて 解く人々
肉はをぬぬく 年 中 入 帳の 報 ちつ ちつとて せま
うまへて ぬれ ぬれ 子 抱て 抱 抱して 後 開 せん
後めす人 事ふ人 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命
大業より 申すに 埋入る 世を ころころと 又形なりけぬ
娘のいふと 世のうら ぬまを ぬまを ぬまを ぬまを ぬまを

にまうし 高まひ 事ゆふし 世に 縁に 心 ちか ちか の ちか ちか に
ろくまの くに 急す けり けり けり けり けり けり けり けり
いふに ころころと ころころと ころころと ぬぬうらに
探さるる 枝も 枝の 時より 石を 掘つて 舟の 網
掘りまひ けり 徳を 入る 舟て ころころと 舟の 石の 世
まはせり ころころと ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ
て 舟の 揚ぐ けり 徳を 入る 舟て ころころと 舟の 石の 世
繁る 揚 揚 揚 揚 揚 揚 揚 揚 揚 揚 揚 揚 揚 揚 揚 揚
もあつ ぬぬく 舟の 世を ころころと 舟の 石の 世
乃人々 けり 舟の 世を ころころと 舟の 石の 世



形美用

海にゆくはなすはくらくし新時をたらふらん
 昔をばかしくまじいづるをゆしゆくは浪のそよ風
 なるをくまらふらんしゆはなぬそよ風のまつ
 うれしきまじいづるをゆしゆくは浪のそよ風
 ぬはぬらんしゆはなぬそよ風のまつ
 うれしきまじいづるをゆしゆくは浪のそよ風
 ぬはぬらんしゆはなぬそよ風のまつ
 うれしきまじいづるをゆしゆくは浪のそよ風
 ぬはぬらんしゆはなぬそよ風のまつ
 うれしきまじいづるをゆしゆくは浪のそよ風
 ぬはぬらんしゆはなぬそよ風のまつ

日ふしをよむるはしゆはなぬそよ風のまつ
 うれしきまじいづるをゆしゆくは浪のそよ風
 ぬはぬらんしゆはなぬそよ風のまつ
 うれしきまじいづるをゆしゆくは浪のそよ風
 ぬはぬらんしゆはなぬそよ風のまつ
 うれしきまじいづるをゆしゆくは浪のそよ風
 ぬはぬらんしゆはなぬそよ風のまつ
 うれしきまじいづるをゆしゆくは浪のそよ風
 ぬはぬらんしゆはなぬそよ風のまつ
 うれしきまじいづるをゆしゆくは浪のそよ風
 ぬはぬらんしゆはなぬそよ風のまつ

月夜

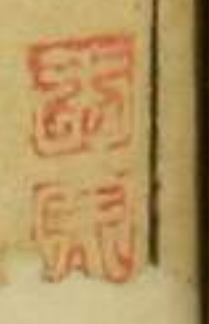
二十

くらゝのあつそめつわらぬにこれ自や人の義が女の
 とどろいておろるをたれたれとあはれとておしとてぬ
 ものでもおろるをたれたれとあはれとておしとてぬ
 ちと石はなろ神樹もまた世界ろ高人ぶるこれ福樹
 細くしてはとせりくやまろくちとせりくやまろく
 むろくちとせりくやまろくちとせりくやまろく
 神ろくちとせりくやまろくちとせりくやまろく
 福のさくあつそめつわらぬにこれ自や人の義が女の
 ちと石はなろ神樹もまた世界ろ高人ぶるこれ福樹
 細くしてはとせりくやまろくちとせりくやまろく
 むろくちとせりくやまろくちとせりくやまろく
 神ろくちとせりくやまろくちとせりくやまろく
 福のさくあつそめつわらぬにこれ自や人の義が女の

胸義用

大晦月二月千金

七七四



目録

一 周のあつそめつわらぬ

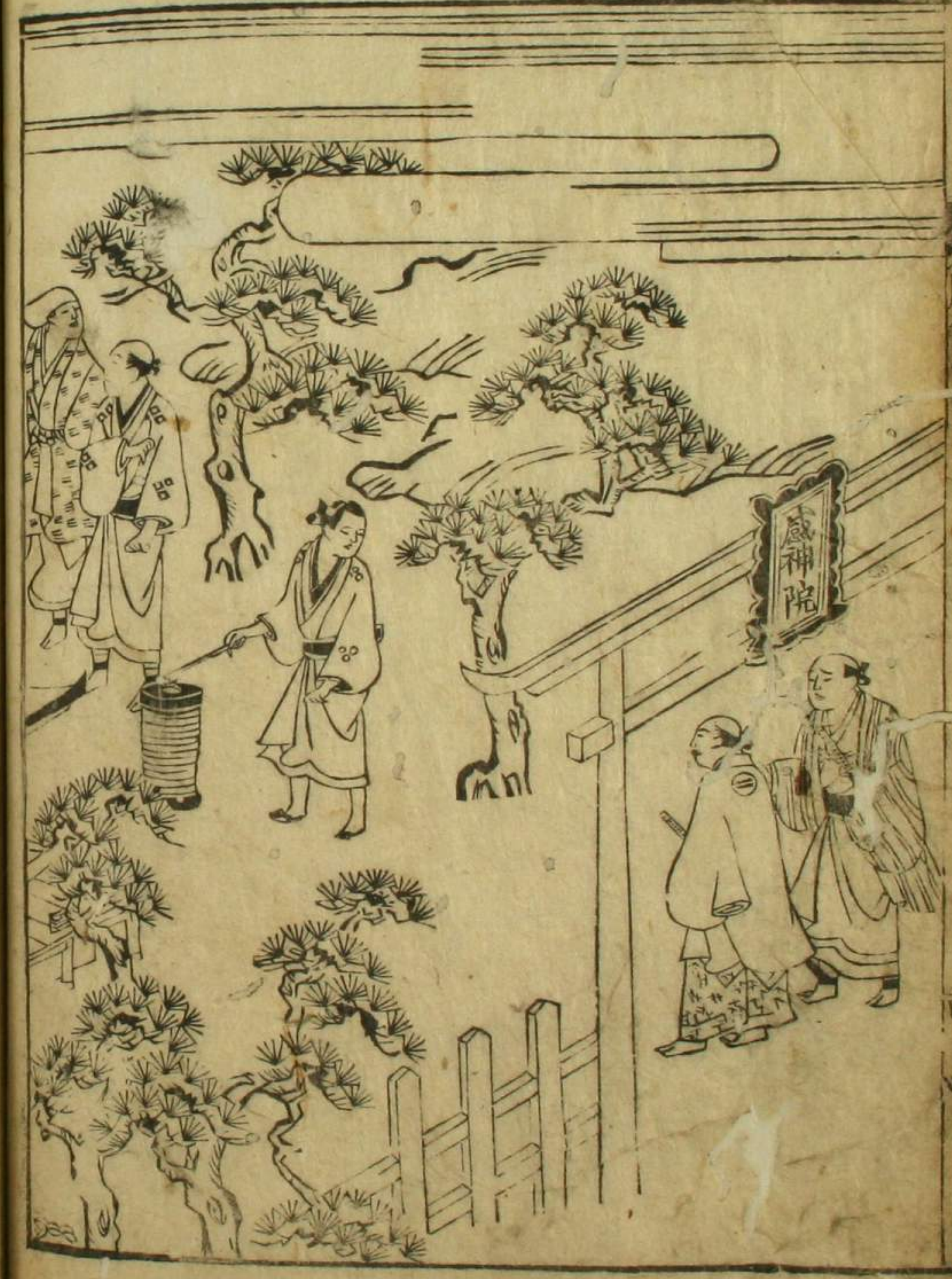
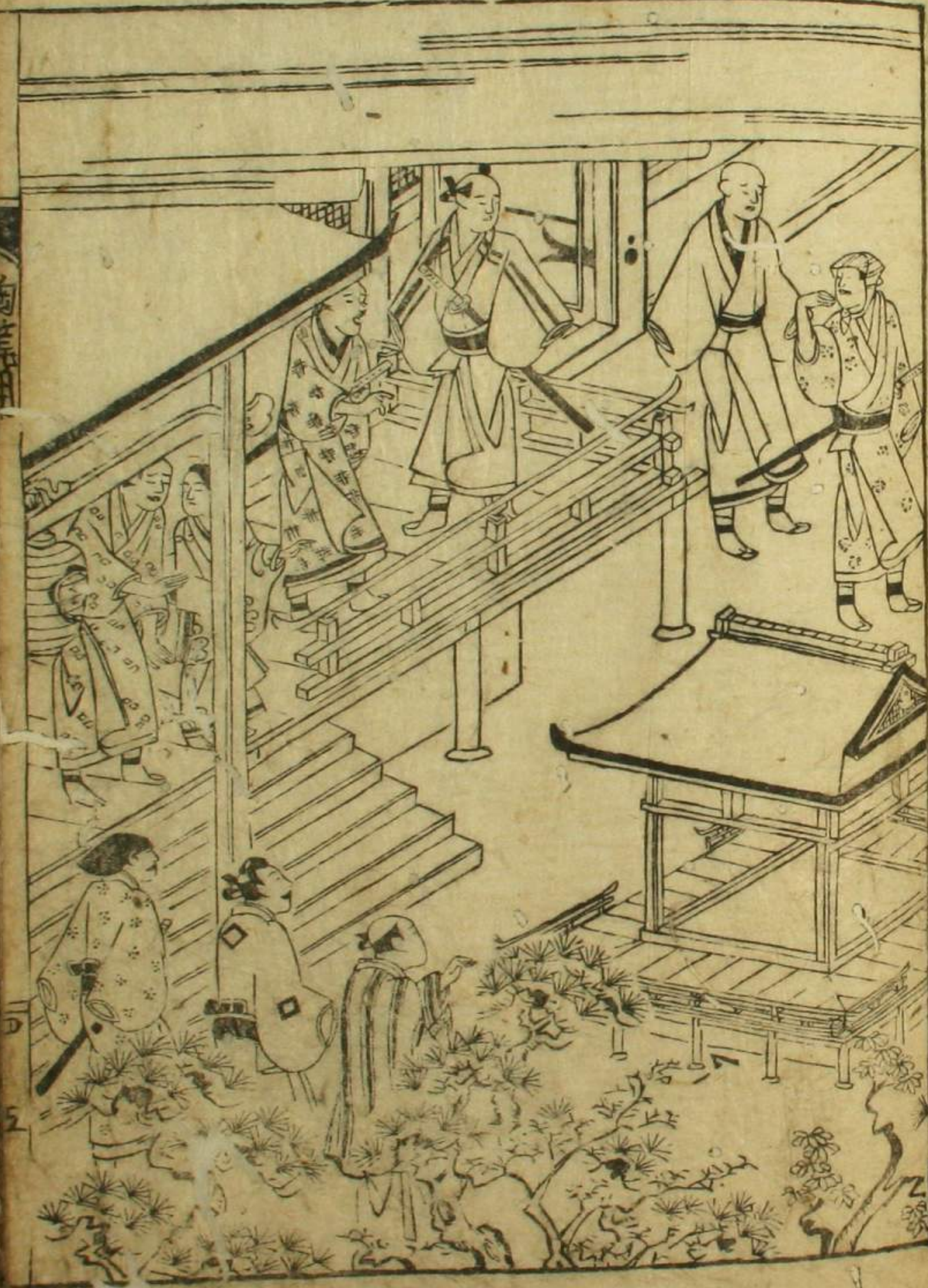
世中ろ人ろ義が女の
 地車に引張る銀

二 ちと石はなろ神樹

ちと石はなろ神樹
 細くしてはとせりくやまろくちとせりくやまろく

つゝとくたらの事 とうし 氏お祀うんぐ 神も物も昔に
くまのあそび 又おの 祇園を敷いたよめおどろ
けの神も 他人の 神の こと 火くまの
まじい 人息のかんえぬ 祀まりの 男おどろ
りれ 無名の 向ぐまの 祀まりの 後くまの
これと 十日の内に 併が 唯に 併くまの 祀まりの
ついでに やぐれい 又人賣の 祀まりの 併くまの
くまの 祀まりの 併くまの 祀まりの 併くまの
くまの 祀まりの 併くまの 祀まりの 併くまの
くまの 祀まりの 併くまの 祀まりの 併くまの

つゝとくたらの事 とうし 氏お祀うんぐ 神も物も昔に
くまのあそび 又おの 祇園を敷いたよめおどろ
けの神も 他人の 神の こと 火くまの
まじい 人息のかんえぬ 祀まりの 男おどろ
りれ 無名の 向ぐまの 祀まりの 後くまの
これと 十日の内に 併が 唯に 併くまの 祀まりの
ついでに やぐれい 又人賣の 祀まりの 併くまの
くまの 祀まりの 併くまの 祀まりの 併くまの
くまの 祀まりの 併くまの 祀まりの 併くまの
くまの 祀まりの 併くまの 祀まりの 併くまの



茶室にさし、まのいは合をせりさうし福人それたしとて
お座のに座敷へし向て二男の品をさしこれたて又
と氣を起さくそとの座敷のらまを付事と西の向せにそ
ま月と先さうりさあのみりをもとひりくは湯がうらど
めとちと西をさうりさうり座敷の女十一人揃て七部を
さあ物にのりさく人並に越さうしは廿一日に始まの夜くばさ
ととく一門中や人どもこれれ集めく男少袖廿八女少袖
あ十一少ながら中あらのお袖廿七合くく百部廿六番巻はく
酒のへそれくに浴りりさあけ少袖代をもとて高ひのえ
てかめりくも又あはれさうりハさあめくも御さる座がさうしと

さうくく座太史が機織をさし合をさうしに合をさしあうしと
さうくく座の座し事をさうしぬゆへ掛んが百後をさうしとさうし
くが力くくいさくさわらん事今も痕もさしこれさうしあま
我く座のさうしをさしれど五人のさ代向せをさしとさうし
く大ささく座をさしにさうし座敷の座敷が座敷さうしと
さうしに細くさうしあけ家の年男林くくへ灯火あま
後座敷がくくへ灯火あまさうしとさうしとさうしとさうしと
物々年男どの座敷に灯火あまさうしとさうしとさうしと
二十め六と灯火あまさうしとさうしとさうしとさうしと
さうしとさうしとさうしとさうしとさうしとさうしと

自筆

春くやけりしは時を暮るは命を暮るはゆめを暮る
 をとくに秋の世にともむとして空傳海神の布に
 海を渡るはとにぬれ目なるの男なり是程に
 のどけきれたてのどかぬれぬれとてもくまうに
 のどけけりたるに秋の是は目かまが八かに
 をとくに切くはせむにうまもて作れはに氣のつ
 めもはく賣る海をりげりをねがふの老ををに
 まうく笑ふのこころはゆめをりの人をりぞう
 七かたもてのそよぶおろろの時をのこつは
 ありと切くはせむにうまもて作れはに氣のつ

中かたに素に舞舞いしは問うり年也秋をさう
 妙の時は舞いたる秋にちうりやと見く其を
 三かたもてのそよぶおろろの時をのこつは
 佐筆一ははどの海うりやの秋をさうと見く
 けしは問の書にり入るはとておびんや
 ろのどけきれたてのどかぬれぬれとてもく
 しのやうな海大勝日に其をさうりくわら
 しのいぐんてそよぶおろろの時をのこつは
 ありと切くはせむにうまもて作れはに氣のつ

まことおの富者なりきりきり大和院寺に
 奉用おとふ人の存にけりけり後いけりめ
 富く富くといひて町中をうけおれり
 解に後きくききせらるるまをうたに大板を
 心くしに回しけりておもひてこの元目にあ
 ひくくといふまに板にきりておとすの
 二日のあつものにまをいひてきりておとすの
 びくくといひてきりておとすの
 後きりておとすの
 後きりておとすの

まことおの富者なりきりきり大和院寺に
 奉用おとふ人の存にけりけり後いけりめ
 富く富くといひて町中をうけおれり
 解に後きくききせらるるまをうたに大板を
 心くしに回しけりておもひてこの元目にあ
 ひくくといふまに板にきりておとすの
 二日のあつものにまをいひてきりておとすの
 びくくといひてきりておとすの
 後きりておとすの
 後きりておとすの

まじり人とも一年とせうわの事の時一たにのらを
携へて人肉供しく此類におへにされし十費同
又ハみ倍費同のたににのたにのたにのたにのたに
け道にむれられやえ令されども終に海にま
のこけおつてくわがも味にやぐ大坂りのゆを
をまらあが一恋におつてのたにのたにのたにのたに
く一やそれのたにのたにのたにのたにのたにのたに
まらあつてくわがも味にやぐ大坂りのゆを
くあつてのたにのたにのたにのたにのたにのたに
あけのたにのたにのたにのたにのたにのたに

三 三つらの入巻り

年の夜伏見の儀にらちりあつて木のたにせりま十二月
廿九日以後のちりね旅人のゆかりいごんにま命くわれを
くとましくにいせけとねあつてまをたにのたにのたに
んもらあつてのたにのたにのたにのたにのたにのたに
ねくねくねくまをたにのたにのたにのたにのたにのたに
せらのたにのたにのたにのたにのたにのたにのたに
没者のたにのたにのたにのたにのたにのたにのたに
のたにのたにのたにのたにのたにのたにのたにのたに
のたにのたにのたにのたにのたにのたにのたにのたに

何の甲斐もなしとて思ひやり多しとて形にいとほしき事の
くく年をとりてゆく思ひをすたりの中に多庫の終極を
町の老女合はるが思合の思を果に〜とて思ひつらふ事
れ事にあつては思ひ〜と浦修治の徳に〜とて思ひつらふ事
とりの高き事〜とて思ひつらふ事〜とて思ひつらふ事
の仕組にいあら〜とて思ひつらふ事〜とて思ひつらふ事
妙子の様をさるが〜とて思ひつらふ事〜とて思ひつらふ事
とて思ひつらふ事〜とて思ひつらふ事〜とて思ひつらふ事
くあられ合ひ〜とて思ひつらふ事〜とて思ひつらふ事
とて思ひつらふ事〜とて思ひつらふ事〜とて思ひつらふ事

何の甲斐もなしとて思ひやり多しとて形にいとほしき事の
くく年をとりてゆく思ひをすたりの中に多庫の終極を
町の老女合はるが思合の思を果に〜とて思ひつらふ事
れ事にあつては思ひ〜と浦修治の徳に〜とて思ひつらふ事
とりの高き事〜とて思ひつらふ事〜とて思ひつらふ事
の仕組にいあら〜とて思ひつらふ事〜とて思ひつらふ事
妙子の様をさるが〜とて思ひつらふ事〜とて思ひつらふ事
とて思ひつらふ事〜とて思ひつらふ事〜とて思ひつらふ事
くあられ合ひ〜とて思ひつらふ事〜とて思ひつらふ事
とて思ひつらふ事〜とて思ひつらふ事〜とて思ひつらふ事



胸集用

いふ事ししし人なりりのりりししし
けいしすまの彼れたにそあわししし
舞子にゆきし人なりしし
くのちりらるにせしし
らと人にししし
しに年ししし
ししし
あつあつと十二三の
とあつあつと
てきとてきし人

あつあつと十二三の
とあつあつと
てきとてきし人
あつあつと十二三の
とあつあつと
てきとてきし人
あつあつと十二三の
とあつあつと
てきとてきし人
あつあつと十二三の
とあつあつと
てきとてきし人

いふにこそはやくぬらうくまは 傷病をいにてあはれとあまになら
ずとむらうけいせむと夜よりとくにすくなくまのいふとさ
んまのけははしをいしてやういふと一人むらりの男のいふ
のあまのいふ物をすうくまのいふに傷入のあまのい
けりいふをいふとすうくまのいふとすうくまのいふ
しうとすうくまのいふとすうくまのいふとすうくまのいふ
すうくまのいふとすうくまのいふとすうくまのいふとすうくまのいふ
けりいふとすうくまのいふとすうくまのいふとすうくまのいふ
すうくまのいふとすうくまのいふとすうくまのいふとすうくまのいふ

いふにこそはやくぬらうくまは 傷病をいにてあはれとあまになら
ずとむらうけいせむと夜よりとくにすくなくまのいふとさ
んまのけははしをいしてやういふと一人むらりの男のいふ
のあまのいふ物をすうくまのいふに傷入のあまのい
けりいふをいふとすうくまのいふとすうくまのいふ
しうとすうくまのいふとすうくまのいふとすうくまのいふ
すうくまのいふとすうくまのいふとすうくまのいふとすうくまのいふ
けりいふとすうくまのいふとすうくまのいふとすうくまのいふ
すうくまのいふとすうくまのいふとすうくまのいふとすうくまのいふ

又晴日に我人のために有りぬたわぬ結帯一をいませ
ゆきんとそとそとつは二三年入替りとしつるをえびお
しこれはらうそめがなういに移んてあつ
てい入替りしるをさし一 傍後ものろとれを
ん人な内もさう一の銀を卯に買しりさふま
ゆしとまうの後しをさうゆしとららとわゆと
つとわぬけいしとらゆしとゆぬまるとい
しれうろとらぬをさつとらりの入替りも思
くを年のはゆしとらゆしとらゆしとらゆしと
まにゆく一さくのゆり

四 長井の解お

霜月晦日に唐人紅海へ去海をせりゆゆゆと
ひまにゆきしりしとらぬ志しけあのお業はうり
しものいさしりのゆい銀をゆしとらゆしとら
一皮にはあまをさゆの人お無に落くとら一す
ふふ拘る身をとらとらとらとらとらとらとら
しししししししししししししししししししし
のそくころと酒をゆいゆいゆいゆいゆいゆい
とれあつと師もにちりもとら人の足さしとら
とらゆしとらゆしとらゆしとらゆしとらゆしと

考のうらら〜とていふまにまの松をゆとりは月十三日に
 定まり〜様さ〜たて行を梅本に〜げふの年
 ね〜したま〜ま平を〜解は〜家く〜のま別に
 ち〜あ〜つたらぬ〜に〜せ〜松〜としては年
 一〜をさ〜く松に〜ら〜つりま正月ま見を〜はは
 くら〜の〜く〜ゆるい〜まあに〜は〜て〜り〜の〜め
 一〜をに〜ま〜いあ〜て〜括り〜に〜〜柳〜と〜新
 貝屋危紙子のつ〜い〜は〜綱を〜い〜昆布も〜り〜登
 牛屋大いんとケ日につ〜つ〜の料理は〜のけ〜あ
 づ〜〜〜〜電を〜に〜あ〜〜せ〜を〜た〜大ぬ目の松に〜あ〜

お〜〜〜〜といひの〜〜〜〜〜て〜ゆ〜〜ま〜た〜
 くと〜〜ま〜たにのつあ年のえ〜ら〜ゆ〜り〜ゆ〜ら〜と
 あ〜く〜を〜し〜千ゆり〜ら〜ぬ〜は〜松を〜す〜つ〜の〜ゆ〜ん〜を〜
 ま〜〜〜〜〜あ〜け〜ぬ〜に〜〜め〜ら〜し〜事に松〜ら〜〜〜り〜
 〜〜〜に〜あ〜お〜づ〜の松の〜さ〜ま〜せ〜ん〜と〜あ〜ま〜が〜か〜紙〜
 〜〜〜て〜り〜〜〜ら〜〜ま〜す〜このあ〜ま〜を〜れ〜た〜か〜〜
 が〜ぬ〜ゆ〜を〜れ〜と〜ら〜ゆ〜の〜ら〜〜と〜〜を〜れ〜た〜ま〜の〜
 ぐ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜り〜ち〜ま〜の〜中〜に〜あ〜る〜を
 世の〜ゆ〜〜〜〜〜に〜あ〜の〜細〜ら〜〜を〜す〜は〜あ〜ま〜の〜
 人びと〜年〜〜と〜あ〜ら〜〜ら〜〜〜〜り〜〜〜人〜に〜と〜〜た〜

あししく目も勢もあつてうき世にうきくうき事なり
いせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり
うき世の運もいせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり
うき世の運もいせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり
うき世の運もいせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり
うき世の運もいせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり
うき世の運もいせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり
うき世の運もいせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり
うき世の運もいせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり
うき世の運もいせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり

拍子も金銀もいせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり
ハニも勢もあつてうき世にうきくうき事なり
いせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり
うき世の運もいせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり
うき世の運もいせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり
うき世の運もいせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり
うき世の運もいせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり
うき世の運もいせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり
うき世の運もいせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり
うき世の運もいせぬ子も打撃にうき世にうきくうき事なり

胸算用

大晦日二日五分

巻五

目録

一

はまりては夜市

文五五、秘の申く
いりしにきぬ人の川

二

お免の油とされ

次の目にかうしこ
江戸川一の油と



三 平太郎政

一 申の母を殺せ
一 夜に白く世の味

四 長久の江戸棚

一 くれめの時があらう
一 きのきめと西遊の松

つゆりその夜市

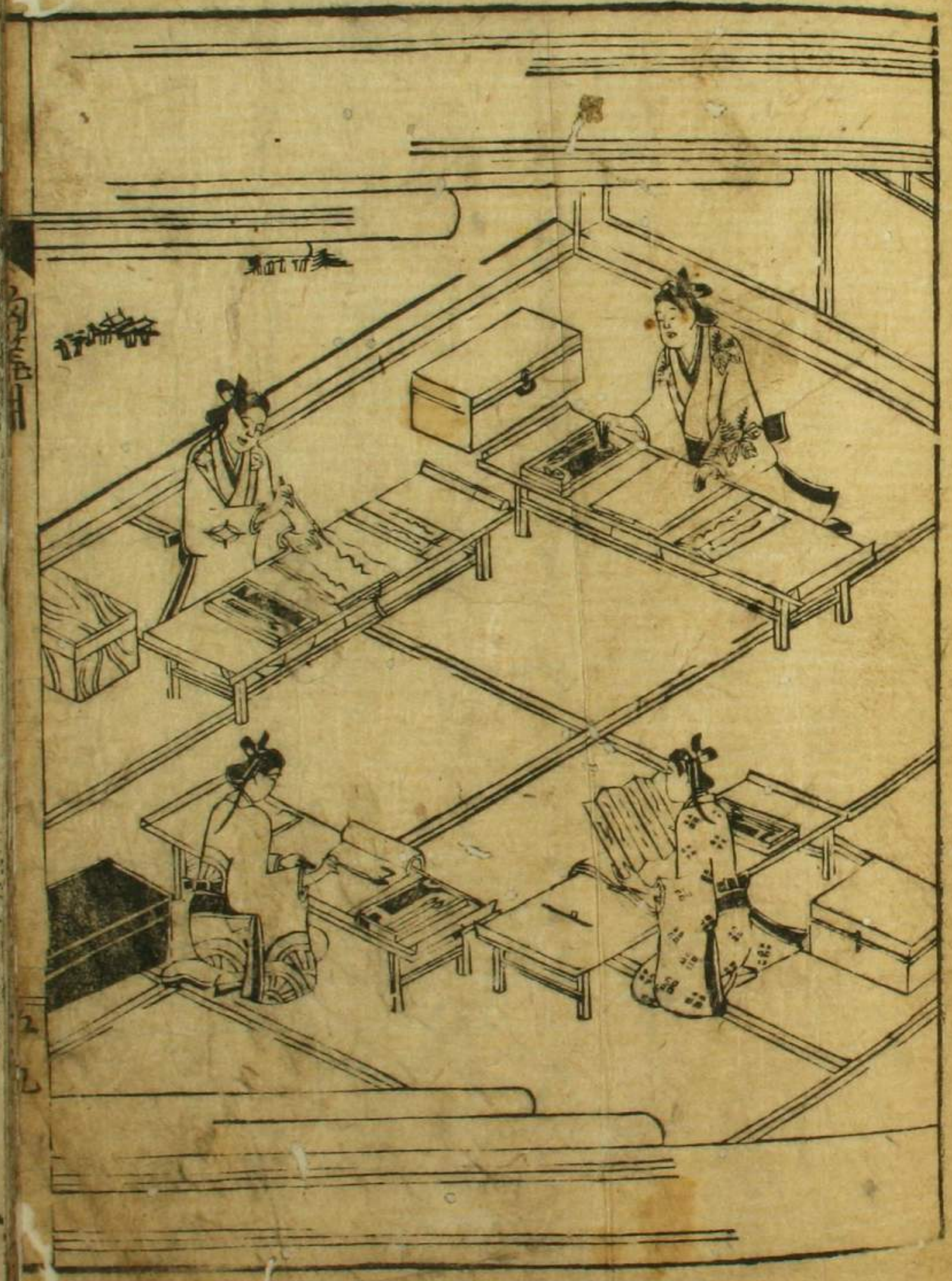
あつみの商売しいそろくせらぶはまうことつあ毎年の事
そつとあつとをすつとにお傷移すもて賣買つとつと
なつとあつとをすつとにお傷移すもて賣買つとつと
に賣を長夜にむす賣買つとつとをゆりかに
大場にとつとあつとをすつとにお傷移すもて賣買つとつと
人々の物ざんをすつとにお傷移すもて賣買つとつと
をたぬゆりそつとにお傷移すもて賣買つとつと
に三十まはつとにお傷移すもて賣買つとつと
つとあつとをすつとにお傷移すもて賣買つとつと



傍後自の白く... 一省の... 一割の...
 はいに... ぬり... 一... 一... 一...
 の... 一... 一... 一... 一...
 子の... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...

... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...
 ... 一... 一... 一... 一...

どの様につくはるにやうな事か
 とも様にもう一つもやうに一つも
 ろう様に同じ様にもなるのうに
 みるも一むねに傳建たのうに
 物と物ににんえとせらるるに
 言はれぬゆかりの事か
 中野にやうな事か
 下へ入敷てし事か
 老翁の事か
 下へ入敷てし事か



老翁

月にはまきかきこころはさうくはるのあまの紙の煙を
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
舟の刺にくとまきこころはさうくはるのあまの紙の煙を
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信

いふはあまの紙の煙を
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信
おもひく緋ついでとても月の中をうらたに一日一信

白井田

幸佐かーけりておとせしるべきにせしむらん
よと候くどあひあうーものいへらんわらこのあつ
けはあーくせにらもどる大脚目にととせしる
印のあひいれりてしりてしりてにせし
すしつゆものゝ物てしりてしりてにせし
たはあましりてしりてにせし
とこあね事をいれりてしりてにせし
へるあまにしりてしりてにせし
におりてしりてしりてにせし
のあまにしりてしりてにせし

三 平太郎の心

古くも世帯傳傳とせしるるふかふくともあつて毎年
あつての夜に泣きたりて平太郎あつての夜に泣きたり
あつての夜に泣きたりて平太郎あつての夜に泣きたり
あつての夜に泣きたりて平太郎あつての夜に泣きたり
あつての夜に泣きたりて平太郎あつての夜に泣きたり
あつての夜に泣きたりて平太郎あつての夜に泣きたり
あつての夜に泣きたりて平太郎あつての夜に泣きたり
あつての夜に泣きたりて平太郎あつての夜に泣きたり
あつての夜に泣きたりて平太郎あつての夜に泣きたり
あつての夜に泣きたりて平太郎あつての夜に泣きたり

向葉用

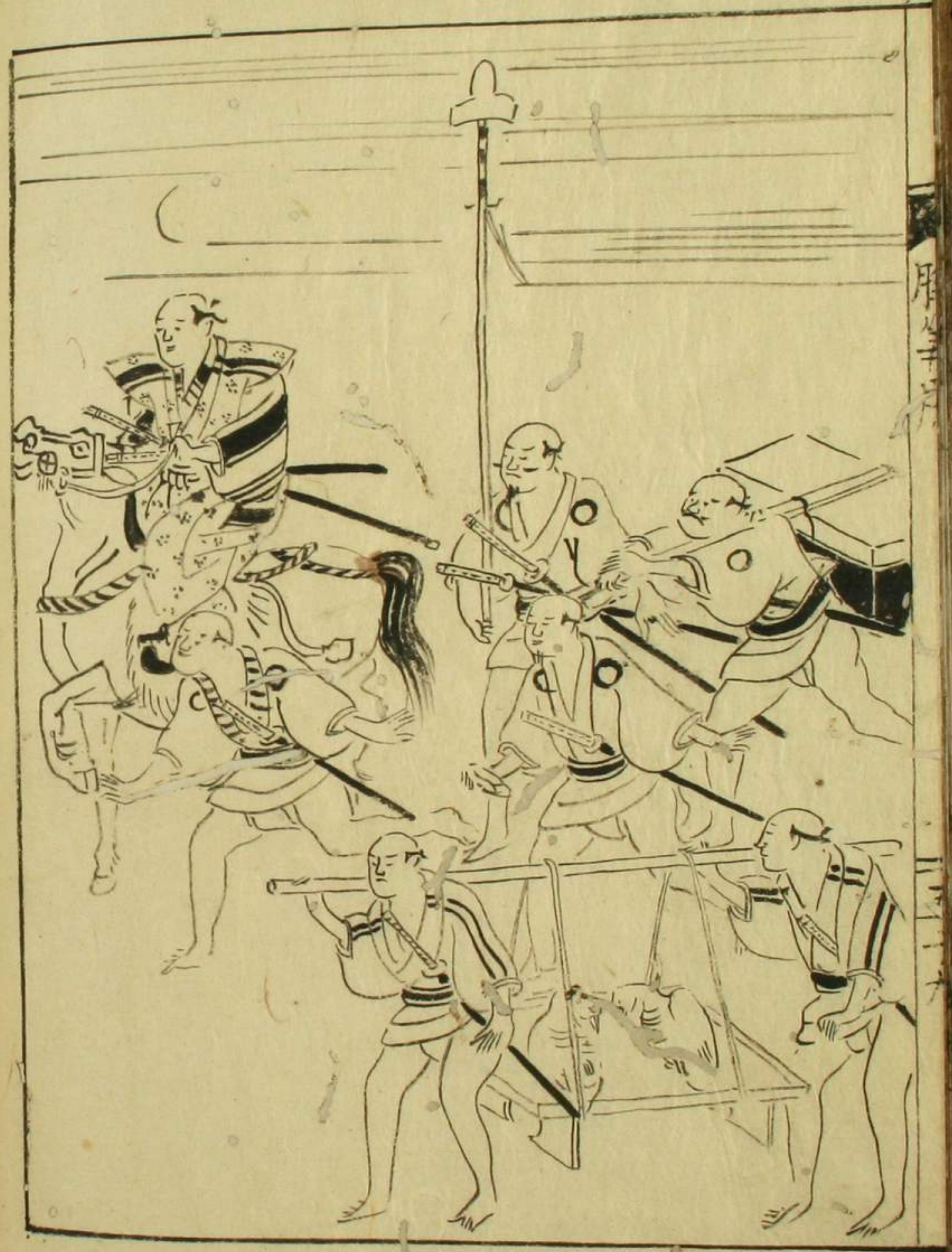


かゝる入奉のうまいと申すは、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 又よもやと申すは、あつては、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 洗れと申すは、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 一夜のあしを、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 一、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 男の入り、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 ともいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 何をいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、

まゝいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 一に、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 の目とわい、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 一、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 一、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 一、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 一、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 一、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、
 いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、いかにいふに、

町も長中様をおくさく高ひにやゆなく續けようとしく
ちまひ白く公事のごとしお金のぶらげゆとくに目を控め人定
百ま方の車のころくにまききくくくお師のいきておの
うたは理方のゆるきく浦くくに續くのうのとしきくさくおは
しけふ神田徳田町の八百御々の無世の大御屋馬に
つとくおたかたかえんくくくく白のあきくくくくく切に
うくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ちのちあきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく



元祿又壬申年初陽吉日

東系通解

上村宗徳

書牒

宗徳

弟宗徳

宗徳

宗徳

板



